

# プレイセンターにおける乳幼児期の 親子参画の在り方に関する研究

## SPACEプログラムを実施することの意義と今後の方向性

佐藤 純子

(2015年9月6日受理)

### 要約

本稿では、ニュージーランドのプレイセンターで始まった乳幼児向けの新たなプログラムとなるSPACEに着目し研究を進めている。調査の目的は、SPACEの活動を通じて①参加する親子が地域の機関とつながり合いを持ち、②仲間をつくりながら親としての自信を獲得しているのか、③子どもの学ぶ権利を保障し、乳幼児期から幼児教育に参加する機会を提供しているのかを探求することにある。

わが国では、2015年4月から子ども・子育て支援新制度が施行され、在宅親子や低年齢児がいる家庭に対する支援や地域を拠点とする子育て支援がますます強化される方向にある。本論文においては、SPACEの取り組みを報告しながら、日本国内にあるプレイセンター事業や新制度下の子ども・子育て支援事業への活用の可能性も踏まえて考察を加えていく。

キーワード SPACE、プレイセンター、乳幼児セッション、地域子育て支援

### 1. はじめに

わが国では、2012年8月に「子ども・子育て支援法」「認定こども園法の一部改正法」「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」の3法からなる子ども・子育て関連法案がつくられた。さらに、2013年12月には、「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律」が成立し、「年金」「医療」「介護」とともに「子育て」の分野も社会保障経費のなかに含まれることとなった。このことは、「税と社会保障の一体改革」の目玉のひとつとして注目を集めた。

2015年4月からスタートした「子ども子育て支援新制度（以下、新制度とする）」とは、先に示した「子ども・子育て関連3法」に基づく新たな子どもや子育てに関わる制度となっている。新制度が施行される前に示された「子ども・子育て支援法に基づく基本方針（案）」では、子ども・子育て支援について、次のように記されている。「子ども・子育て支援とは、保護者の育児を肩代わりするものではなく、保護者が子育てについての責任を果たすことや、

子育ての権利を享受することが可能となるよう、地域や社会が保護者に寄り添い、子育てに対する負担や不安、孤立感を和らげることを通じて、保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じることができるような支援をしていくことである。」これを受け、新制度においては、乳幼児期の教育・保育に加え、地域子育て支援の質の向上と量の拡大についても力を入れていくこととなった。しかし、これまでのわが国の保育や子育て支援の文脈においては、親をサービスの受け手であるとして捉えることが多く、親たちの主体的な子育ての相互扶助活動を通じて、親自身が子どもとともに成長するという視点が欠けていた。今後は、上記の基本方針でも明示されたように保護者が自己肯定感を持ちながら、わが子と向き合えるような場所を創設していくことが期待される。このような場所の一つとして、ニュージーランド発祥の親による協働運営の子育て支援施設「プレイセンター」が参考となるであろう。プレイセンターの参加効果に関しては、①親のエンパワーメント効果②子ども理解が深まること③親子が共に成長できる場所となっていること④子どもの学ぶ権利が保障されている活動であること⑤親の保育参画が教育・保育の質を向上させていることなどの諸点が指摘されている<sup>1)</sup>。

ニュージーランドのプレイセンターでは、初めて子どもを持つ親と乳児のためのプログラムが2003年から新たに始まっている。本稿では、その新たなプログラムとなるSPACE (Supporting Parents Alongside Children's Educationの略。日本語に翻訳すると、「子どもたちの教育活動に寄り添う親たちを応援するプログラム」となる) に着目している。ニュージーランドのプレイセンターにおいては、SPACE活動を通じて①コミュニティの活性化②初めて子どもを持つ親に対するエンパワーメント③子どもの学ぶ権利を尊重した実践が推進されていることがわかっている<sup>2)</sup>。本稿においてSPACEを研究する目的は、①3歳未満児の多い日本型プレイセンターに対する示唆を得ること②新制度において強化された地域子育て支援拠点事業の枠組みの中でSPACEを実施することが可能であるかを検討することにある。

## 2. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、ニュージーランドのプレイセンターで行われているSPACEの実態調査を行った。調査は、ニュージーランド・オークランド市で実施している。具体的には、2015年7月30日～8月7日までの期間中に筆者がいくつかのプレイセンターに赴き、SPACEセッションを行っている2つのグループを参与観察した。また、地区のSPACEを統括するコーディネーター業務を担うMさんおよびセッションを運営するファシリテーターのDさん、参加する母親2名に対する半構造化インタビューをプレイセンター内で実施した。コーディネーターやファシリテーターに対する調査項目は、①属性、②SPACEの参加年数、③SPACEの指導者となった経緯、④SPACEの活動評価、⑤SPACEが抱える課題、⑥SPACEによって得たこと(自分自身の成長など)、⑦日本のプレイセンターに対するコメントを中心に構成した。他方、親に対しては、乳幼児を連れた参加であるということを考慮

し、①属性、②参加動機、③参加時期、④参加後の変化、⑤SPACEのプログラム終了後の進路など簡略に質問できる内容構成とした。この他、筆者が2010年5月に訪問したウェリントン市のSPACE本部事務所で見聞した内容と同年9月に訪問したクライストチャーチ市のプレイセンターで撮影したSPACEの映像についても参考資料として用いている。

### 3. プレイセンター活動とSPACEの概要

#### 3-1 プレイセンターについて

ニュージーランドにおけるプレイセンターの始まりは、第二次世界大戦中の1941年にさかのぼる。当時は戦時中であったため、若い家庭では父親が出征し、母子が孤立化した。そのため、子育ての仲間を増やし、育児負担を軽減するための自主保育活動としてプレイセンターが始動した。初期の頃のプレイセンター活動では、実施回数を調整したり、指導者を有償で雇ったりするなどそれぞれの方法を用いセンター運営を担ってきた。しかし、1948年にプレイセンターの統括機関としてニュージーランド・プレイセンター連盟が設立されるようになると、プレイセンターはニュージーランド政府認可の幼児教育機関へと成長を遂げた<sup>3)</sup>。その結果、プレイセンターでは認可施設としての最低基準を充たすことが必要となり、保育の質を担保するために親教育コースが実施されるようになった。現在では、プレイセンターの親教育コースは、プレイセンターを特徴づける要素の一つとなっている。初期の頃は、学習コースの数は少なかったものの、現在は6コースの学習段階が設定されている<sup>4)</sup>。そして、到達段階に応じてプレイセンター独自の資格が付与されるようになっている。また、センター外においても単位認定がなされており、大学などの教育機関に編入学する者もいる。

プレイセンターの特徴は、①子どもの自主自由遊び ②親の学習 ③メンバーによる協働運営であり、70年以上経った現在もプレイセンター活動が継続されている。2014年の数字では、ニュージーランド国内に447か所のプレイセンターがあり、約13,556人の子どもたちが登録している。

プレイセンターのセッションは、午前中の2時間半で設定されていることが多い。登録する子どもの年齢は0歳から就学前までであり、子どもが2歳半以下の場合には、親または養育者が同伴しなければならないことになっている。遊びのセッションでは、一斉遊びの時間はほとんどなく、子どもが好きな時に好きな遊びができるような環境を設定している。これらのことから、プレイセンターは、子どもに対する遊び場・学び場であり、親に対する子育ての場、成人教育の場となっていることがわかる。

3

#### 3-2 SPACEが計画された背景

2002年にニュージーランド政府は、10年間の教育戦略政策「未来への道筋（Pathways to the future）」を立案し、その中で幼児教育機関の改革（COI）プログラムを発表した。2003年には、第1期の改革プログラムとして6つが選出された。改革において重要視された項目は、以下のとおりである。

- ①就学前の子どもの学びが向上するように幼児教育カリキュラムTe Whārikiに基づいた指導計画を実施していくこと
- ②研究者と幼児教育機関が共同研究をし、教育・保育の質の向上に向けた取り組みを進めること
- ③幼児教育機関と保護者および家庭が連携を図り、情報や知識を共有し、実践を理解しあうモデルを確立すること

プレイセンターの改革は、第2期において進められることになり、改革プランとしてSPACEプログラムが開発された。SPACEを先行的に始めるプレイセンターとしては、ウエリントン市ハット・プレイセンター協会のテ・マルア／マンゴロア プレイセンターが選ばれた。プレイセンターの改革では、教育・保育の質を高めるために、2つの目的である①プレイセンターと研究者間の協力体制を整えること、②より多くの子どもがプレイセンターを含む幼児教育機関に参加できるようにすることが設定され、SPACEプログラムの開発に至った。

### 3-3 SPACEの実際

SPACEプログラムは、ニュージーランド・ウエリントン市のハット・プレイセンター協会が中心となり計画が進められ、2003年に実験的に始められた。対象は、初めて子どもを持つ親と概ね生後約3カ月～1歳までの乳幼児とされている。SPACEを実施する目的は以下のとおりである。

- ①次に掲げる二つの項目を通じて、参加する親たちが親としての役割を果たし、親は子どもにとっての重要な教育者であることを親自身が自覚できるようにサポートしていくこと。
  - ・子どもが発達していく姿を他の参加家庭やファシリテーターとともに共有し、育児のサポートを受けながらも親としての自信を獲得していくこと。
  - ・親たちをプレイセンターや地域の子育て支援機関、幼児教育機関、活動、グループなどつなげ、地域コミュニティと連携が図れるような機会を提供すること。
- ②新生児から始まる「子どもの学び」を尊重し、幼児教育機関や子育て支援施設への利用率を増やしていくこと。

上記の目的を達成するため、地域の協会ごとに少しずつ運用方法を変えながらSPACEプログラムを実施することとなった。セッション（2時間／週）は、約10週間に渡り、年間3～4回の割合で開催されている。開催期は、概ね、小学校の学期（ニュージーランドは4学期制）に合わせて実施され、学期につき1回程度の開催となっている。

セッションでは、以下のことを踏まえながら進行していくことが推奨されている。

- ①親同士が出会い、一緒にお茶を飲んだり、会話を楽しんだりしながら、トレーニングを受けたファシリテーターのもとで互いの学びを深めること。
- ②子どもの発達状況に対応した内容や親自らが提案したトピックに沿ってディスカッションを行うこと。
- ③手遊びや童謡、絵本を通じて、乳幼児とともに音を楽しんだり、読み聞かせをしながら児童文化に親しむこと。

その後SPACEは、現代家庭のニーズに応える活動として急成長を遂げ、全国各地に広がっていった。もともとは、プレイセンターの一事業として発展してきたSPACEではあるが、プログラム修了後の移行先（進路）は、プレイセンターだけに留めることなく、地域のさまざまな施設を紹介することにした。また、SPACEが拡大していくにつれてプレイセンター側の業務量が過剰となり、2010年10月20日からは、SPACEがプレイセンター連盟から独立し、公益信託として再スタートを切ることになった<sup>5)</sup>。独立後は、SPACEの実施を希望する団体を募り、プレイセンター以外であってもPartners（パートナー）として登録の認可が受けられるようになり、SPACEの実施ができるようになった。2012年の年次報告書によると、パートナーの数は全国32団体ある。そのうち各地のプレイセンター協会が19団体、教会・保育所、幼稚園などが9団体、保健所などの地域団体が4団体、その他高等学校との連携事業が1団体となっている。2011年現在、年間約143プログラム、合計458プログラムが終了しており、今後もSPACEの数が増加していくことが予測されている<sup>6)</sup>。SPACEのファシリテーターとなるためには、プレイセンターの経験者の場合、6段階の親学習コースのうち、3段階まで修了することが必須となる。加えて、就学前の子どもがいないこともファシリテーターになることの条件となっている。以上の条件が満ちていれば、全国組織となるSPACE NZ TRUSTが用意したトレーニングコースを3日間受講し、ファシリテーターの資格を取得することができる。

## 4. オークランド市で実践されているSPACE

### 4-1 タマキ・プレイセンター協会のSPACEについて

オークランド市内のタマキ・プレイセンター協会では、2006年からSPACEを導入している。この協会では、年間に3回または4回のSPACEを行っている。プログラムに加入できる年齢は、子どもが生後3～4ヶ月から概ね1歳までであり、対象は当該児童と初めて子育てをするその親となっている。希望があれば、第二子、第三子でもセッションに参加できるが、SPACE対象児以外の子どもをセッションに連れてきてはならないことになっている。参加費用としては、1学期につき45ドル（日本円で4000円程度）の寄付をお願いしている。また、SPACE NZ TRUST独自で開発した2冊のテキスト：*Heart of Parenting-Early Months*（親になるための心得—新生児・乳幼児版、「睡眠・視覚・聴覚について」や「親になることとは？」などのテーマが掲載されている）と *Heart of Parenting-Moving Along*（親になるための心得—乳幼児期版、「脳の発達」、「子どもの動作」、「親として内省する」などのテーマが掲載されている）があり、1冊につき10ドルで販売している。

SPACEは、3つの段階ごとにコースを分けて実施している。最初の二つは、Topics Units（テーマにそって学びあう）であり、その後は、Introduction to Play Units（遊びへの招待）となっており、ひとつのコースにつき10週間～12週間かけて行っている。

どのセッションも2時間半以内となっており、①受け入れと落ち着く時間②主活動③情報共有タイム④お茶の時間⑤音楽（童謡・手遊び・リトミックなど）⑥ディスカッション（ゲ

スト・スピーカーを呼ぶこともある)を含めながら実施している。また、学期の初めには、グループ共通のルールをメンバー同士で話し合っで決めることになっている。ファシリテーターは、どのグループにも毎回必ず2人を配置している。一人は、セッションを進行していく役割を担っている。もう一人は全体を見渡す役割として、親たちのサポートに入ったり、泣いている乳幼児をあやしたりしながら進行役の補助をしていく。

#### 4-2 事例研究：Cプレイセンター 3段階目：Introduction to Play Unitsグループ (1) SPACEセッションの一日

Cセンターは、海に程近い住宅街にあるプレイセンターである。SPACEは、毎週月曜日の12:30~15:00までの時間帯で行っている。教育省からは、定員16組で運営許可を得ている。このグループは、SPACEの中でも最終段階のプログラムとなるため、対象児は9か月~12カ月位の子どもが想定されている。

筆者が訪問した日は、14組の親子が参加していた。12時半からの開始となるが、乳幼児を連れての活動となるため、13時までに順次登園する形を採っていた。13時になると、ファシリテーターが声掛けをし、親子がマットの上にサークル形に座った。中央にはトレジャー・バスケット(おもちゃの入ったカゴ)がいくつか置いてあり、数名の子どもが遊んでいた。最初は、歓迎の歌から始まった。各子どもの名前を歌詞に入れながら、全員分のフレーズを皆で歌う。13:15分頃からは、ファシリテーターの2人がそれぞれ持ち場で用意したコーナー遊びを親子に紹介していく。この日は、室内コーナー、砂遊び・水遊びコーナー、お絵かきの3つのコーナーが設定されていた。プレイセンターでは、16分野別コーナー遊びを用意しているが、SPACEの場合は乳幼児のセッションとなるため、乳幼児ができる遊びをいくつか選択し、毎回2~3か所のコーナー遊びを提供している。ある子どもは、砂場でバケツに入った水を掬っては砂にかけ、繰り返し遊んでいた。別の子どもは、庭に敷かれたレジャーシートの上に座り、アクリル絵の具を使い全身を使って絵の具遊びを楽しんでいた。ダイナミックに遊ぶその姿は、プレイセンターで遊ぶ子どものものであった。

14時になると、おやつ時間となった。親たちは子どもをあやしながら、コーヒーやスコーン、クラッカーなどを食べ、他の親たちと会話を楽しんでいた。ファシリテーターは、親同士の会話を見守り、必要に応じて介入してく。14:20位になると、親たちは他の親子との交流を継続しながらもファシリテーターから手渡されたシャボン玉を行う。飛んでいくシャボン玉を乳幼児が



資料1 絵の具遊びをする女児

追いかけたり手に乗せたりしている。休憩時間が終わると、ファシリテーターがシャボン玉をテーマとした絵本を読み始めた。そこに子どもが近寄って行き、順番にページをめくる手伝いをしていた。14:30になる頃、リトミックの時間となった。皆で歌を歌って踊ったり、手遊びをしたりした。14:45になると、さよならの歌を歌う。歓迎の歌と同じように、各子どもの名前を入れながら、ひとり一人とお別れする。その後は、順次帰宅し、15時にはすべての親子がプレイセンターを後にした。

## (2) 参加者の声・9か月男児の母親

参加しているある母親に、SPACEへ参加することにした動機、参加後の変化、プログラム終了後の予定などをきいてみた。

この子が初めての子どもです。CプレイセンターのSPACEに来たきっかけは、地域の人に勧められたので来ることにしました。SPACEに参加してから、子育てのスキルが高まったかといえば、それほど変わりはないです。それは、きっと私が小学校の先生をしているからだと思う。すでに子どものことをよくわかっているからかもしれない。でも、同じくらいの赤ちゃんがいるお母さんたちと友達になれて本当によかったと思っている。地域で子育てしている実感もわくから。実は、あと二カ月したら、この10月からは、私、小学校の教員に戻るのです。SPACEのことが気に入っているから、残りの生活を子どもとじっくり楽しみたいと思っています。

この母親は、地域の母親とつながれたことがSPACEから得たことと述べていた。参加後の変化は特に見られないものの、職場復帰しなければ継続したいと話していた。

## 4-3 事例研究：Bプレイセンター 1段階目：Topic Unitグループ

### (1) SPACEセッションの一日

Bプレイセンターは、オークランド市内からフェリーや車を使い45分の立地にある海岸沿いのセンターである。このセンターでは、毎週金曜日に12:30~15:00までの時間枠でSPACEを実施している。Cセンターと同じく、教育省からは、定員16組で運営許可を得ている。このグループは、3段階のうち最初の段階のプログラムを実施している。おおよその対象児は、3か月~6か月未満の子どもが想定されている。

筆者が訪問した日は、登録している16組中、半分の8組が参加していた。一番小さい乳児グループとなるため、欠席や途中参加の人数も多いという。普段は、12組程度の参加があるため、この日は珍しく少ない日だとファシリテーターは述べていた。Cセンターと同様に、12:30~13:00までに順次登園するスタイルを採っている。13:00になると、ファシリテーターの声掛けのもとに歓迎の歌が始まる。熟睡中の子どももいたが、その子の歓迎の歌も歌い、セッション中は静かな場所で眠らせていた。歌の後は、シェアリング・タイム(情報共有の時間)となった。当日、共有した話題は、「赤ちゃんから笑顔をもらった最近の出

来事」であった。左端に座っていた母親から一人ひとり順番に話をしていく。ある女児の母親は、わが子が躰をかいて寝ていたことに思わず笑ってしまったと答えていた。別の男児の母親は、寝返りが始まったので、元の体勢に戻してやると、また寝返りをする。何度も繰り返しているうちにまるでゲームをしているかのような錯覚に陥ったと語る。最後に話した女児の母親は、最近何でも口に入れるようになり、中でも紙がお気に入り



資料2 ディスカッションする親たち

で食べてしまうと報告する。親たちは、大笑いしながら他の親たちの発言を聞いていた。

13:30になると、ファシリテーターが用意したプリントが配布された。それは、「子どもの脳の発達」についての資料であった。健康増進プログラムのテーマのひとつであるという。SPACEのいくつかあるプログラムの中から、ファシリテーターがグループの現状に合ったテーマを毎回選び提供している。この時は、ファシリテーターから感覚遊びと脳の関係についての説明がなされた。また、乳幼児期は繰り返しの動作が重要であり、同じ絵本・同じおもちゃ・同じ歌・同じページなどを子どもとともに繰り返し遊ぶことが大切であると説かれていた。さらに、参考文献や参照するとよいホームページなども紹介していた。13:50になると、休憩の時間となった。センターで用意されたお菓子や参加者の一人が焼いてきたチョコレートケーキとともにお茶を飲み、それぞれ思い思いに時間を過ごす。14:20頃になると、ファシリテーターが用意したパラシュートで親子を覆い、布を上下に揺らして遊ぶ。その後は、音楽の時間となった。いろいろな歌を皆で歌い、子どもを膝に乗せたり、くすぐったりと曲に合わせて様々な動作を加えていく。時刻が14:40になると、絵本の時間が始まった。本のタイトルは「CHILD OF AOTEAROA (ニュージーランドの子ども)」であった。内容は、乳児には難しい内容ではあったが、子どもたちに伝えたい内容が描かれている絵本であれば、それらを繰り返し読むようにしているという。14:45には、さよならの歌が始まり、再び一人ひとりの名前を呼びながら歌を歌い終了となった。

8

## (2) 参加者の声・4か月男児の母親

Bセンターでは、Cセンター以上に子どもが小さいため、なかなかインタビューの時間が作れなかった。お茶の時間に4か月児の母親と話すことができたので、以下に記すことにする。

私がこのSPACEに通うようになったのは、私自身、専業主婦なので、同じくらいの月



年齢の子どもやお母さんたちと会いたいと思ったからです。ここにいるメンバーは、皆初めての育児をしている親たちです。だから、育児の問題があったり、困った出来事があったりしても一緒に解決していくことができます。初めての子育てで嬉しい出来事も困ったことも一緒にシェア出来るところが良い所ですよ。大体のお母さんとは、SPACEに入る前に検診などで会ったことがあるお母さんばかりなので、そこは安心できています。変化としては、子育てについて必要な知識や方法、工夫などが他のお母さんの姿からも学べることで、自分自身が親として向上できたことです。それにここは、とても居心地が良いので、精神的にもプラスになっている。SPACEには、3段階目（最後の学期）まで通いたいと思っています。子どもは、とってもかわいいし、わが子の近くにいたいので、フルタイムの仕事に就くつもりはないけれど、来年からはパート勤務するつもりでいます。私が仕事する時間は、夫に子どもを見てもらう時間を作ってもらったり、自分の母親に育児を代わってもらったりしようと考えています。

この母親は、初めての子育てを他の親たちと共有することで、育児に対する不安感や困難さを克服していた。今後も子どもと一緒に過ごしたいと考えるものの、一人の女性としても活躍したいと述べ、パートをしながら育児と仕事を両立することを望んでいる。

## 5. SPACEの運営を下支える支援者たち

プレイセンターの運営は、親たちで係や仕事を分配して運営している。しかし、SPACEの場合は、いずれは協働の形を望むものの、ファシリテーターが先導する方法でセッションを行っている。子どもの手が離れないうちから、親に過度の負担を与えないようにと考慮された結果である。つまり、子どもが乳幼児期の頃は、親子で活動を楽しんだり、友情を育んだり、リラックスできるグループ活動が適していると考えられている。

SPACEのセッションをうまく進行していくには、進行役となるコーディネーターやファシリテーターの手腕が問われることになるであろう。そこで、支援者に対するインタビュー調査にも取り組むことにした。

### 5-1 コーディネーターMさん（4人家族、15歳女兒・13歳男児の母親）

#### （1）プレイセンター・SPACEプログラムに参加した背景

Mさんが、プレイセンターに通い始めたのは、長女Pが1歳の時からである。2歳下の息子Lも小学校にあがるまでプレイセンターに通い、通算、6年間プレイセンターに所属していたという。Mさんが、SPACEに関わるようになった理由は以下のとおりである。

私は、うちの子たちが小学校にあがる少し前からプレイセンター協会の仕事を始めたの。交渉係や地域のプレイセンターのサポート業務、親の学習コースの講師、プレイセンターのプロモーション担当などいろいろやりました。下の息子が小学校に入学してからは、SPACEの方に関わるようになってコーディネーターやファシリテーターをするようにな

りました。プレイセンターと両方だと負担が多すぎるので、SPACEに絞ったのです。当時、SPACEの支援者を募集していたから、子どもも学校に行くようになったし、やってみようかなと思って始めたのがきっかけね。SPACEは本当によくできたプログラムだと思ったし、私自身が親たちとかかわって働く仕事が好きだったから。親たちには、赤ちゃんにとっての先生（エキスパート）であることを教えてあげて、親たちをエンパワーメントしていくことがとっても素敵だと思えたから。初めての育児だと、情報が多すぎて、必要な情報にたどりつけないこともある。その情報を整理してあげることもファシリテーターの役割だし、お母さんが孤独に陥ることなく、他の親も悩んでいるらだって、皆同じなんだって気づいてもらうそのお手伝いできて良かったと思っています。

現在、Mさんは、SPACEのコーディネーターとして活躍する。コーディネーターの役割について次のように説明している。

コーディネーターは、地域のプレイセンター協会に所属する全てのSPACEプログラムがうまく進むように調整する役割です。例えば、プレイセンター協会に限らず、教会や保健センター、地域の公共施設、団体を訪問してSPACEをやってみないかと働きかけたりもしている。それと、初めてSPACEに参加する親子がいたら、連絡を取り合い、スムーズにプログラムへ入っていくようにサポートもする。登録に関わる業務も担当しているの。SPACEが新規に立ち上がる場合には、開設準備も私の仕事ね。一方、ファシリテーターは、プログラムの講師的な役割と言ったらわかりますか。実際にお母さんと子どもと一緒にセッションを進めていく人のこと。私も以前はファシリテーターをしていたけど、今は、全体を統括するコーディネーターをするようになったの。

プレイセンターの元参加者であるMさんは、どのようにしてコーディネーターやファシリテーターになったのだろうか。そこで、支援者になるために必要な資格について聞いてみた。

プレイセンターの親教育のコースには6段階ありますが、3段階のコースが修了すれば、SPACEのファシリテーターになるトレーニングを受講することができます。それとともに、受講者がこれまで培ってきた知識や経験も必要になってきます。例えば、子育ての経験や保育の経験なども加味される。ファシリテーターは、赤ちゃんの専門家ではないですから。お母さんたちとディスカッションできるように柔軟な対応と話題の引き出しを多く持っていることやセッションを組み立てていくような力も求められます。ファシリテーターやコーディネーターになるための研修は、3日間あります。たいていは、週末に行われます。9時から17時までの終日研修を3日間です。講座の内容は、SPACEが実施されるようになった沿革、ファシリテーターとしての役割、技術的な内容、グループのまとめ方などが中心となります。分厚いテキストが配布されますが、この講座では深い内容には踏み込みません。実践をしながらテキストを参照し、習得していくから

です。ですから、この講座では、基本的なSPACEの実施計画やファシリテーション・スキルなどを身につけることを目的としています。

## （2）参加効果について

参加している親に何か変化は見られたのだろうか。SPACE参加後の効果についてMさんは次のように語っている。

赤ちゃんを産むと全てが初めてのことばかりで、いろいろと自分で試していく中でわかっていくことが多いと思うの。だから単純に、SPACEで子育ての経験を積んでもらいながら親としての自信をもってもらうようにしていくことが重要。実際に親に聞いてみると、ファシリテーターの存在がいることが大きいみたい。親だけでなく、先輩ママがいることで気持ちが安らぐといいます。それに、他のお母さんたちも本音で語ってくれることが良いみたい。これが他の場所だと、単なる茶飲み友達で終わってしまうでしょ。本音で語り合うこともなく、互いをけん制して競争が始まってしまう。他の赤ちゃんが出来るのに、どうしてうちの子が出来ないのって焦ったりして、競い合ってしまう。SPACEでは、本音で語り合えるだけでなく、ファシリテーターもディスカッションに加わるので、自分の答えに自信が持てるようになり、自分のやり方でいいんだってOKが出せるように親が変わっていきますね。プログラムが修了する頃には、子どもへの関わり方も上手になっているし、親として何か決断しなければならぬ時も自信を持ってできるようになっていきますね。

親同士をつなぐファシリテーターの存在がいることで、本音で語れるようになり、他の親も自分と同じように悩み、子どももそれぞれに発達の違いがあることを親自身が気づいていくのだという。また、乳児の頃から様々な遊びを通じて経験を積むことの重要性についても確信を深めていくようだ。

## （3）SPACEプログラムの課題

この地域でSPACEを実施して10年近く経つが、課題はどんなことがあげられるだろうか。Mさんは、SPACEの課題について以下のように述べる。

やっぱり1歳以下の子どもの場合、まだ睡眠のリズムが赤ちゃんごとに違うので、なかなかセッションのタイミングに合わないってことね。そこが難しいところです。プレイセンターが午前中、施設を使っているの、SPACEは午後しかできないのです。そうすると午睡の真最中だったりして。だから寝ている子が来た場合には、ブランケットをかけてそのまま寝かせておいたり、途中で抜けて家に帰ってもよいことにしています。課題のもう一つは、ファシリテーターの数が足りないことです。この地域でももう少しSPACEプログラムを増やしたいのですが、この協会には6人しかファシリテーターがい

ないので、定期的にファシリテーターの講座受講者も増えていって欲しいと思っています。プレイセンター内の人材だけで賄うのは難しいので、地域の団体でもSPACEをやってくれそうなパートナー団体をさらに増やしていくことも課題となりますね。

## 5-2 ファシリテーターDさん (5人家族、16歳男児・14歳女児・12歳女児の母親)

### (1) プレイセンター・SPACEプログラムに参加した背景

地域の様々なプレイセンターに赴きSPACEのファシリテーターとして活躍するDさんは、Mさんと同じプレイセンターに15年以上前から通っており、Mさんとはプレイセンター活動を通じて知り合った。DさんはMさんと同時期にSPACEのファシリテーターとなり、6年以上が経過している。

この協会には、数名のファシリテーターがいますが、私は、初期の頃にファシリテーターとなった者の一人です。ここのプレイセンター協会がSPACEをスタートする時からずっと関わっています。SPACEを拡げるために広報活動もたくさんやりました。たまたま、自分の子どもたちと一緒に通っていたBプレイセンターがこの地域の第1号としてSPACEを始めることになって。それならばとファシリテーターになることに決めました。SPACEの内容構成がとっても良かったので、迷わず講座を受けることにしたのです。

### (2) SPACEの良い点

Bさんは、SPACEの内容がとてもよいと語るがどのような所がよいのかを具体的に聞いてみた。

良いところは、たくさんあるわ。私が、SPACEで一番好きなのは、地域に住むお母さんたちや赤ちゃんと会えることよね。そして、来てくれた親子が他の親子と関係性をつくっていく。そして友情が育まれていく。そのお手伝いができることは、素敵なことだなんて実感しています。それに、SPACEの内容がとっても良いって言いましたよね。本当に小さい赤ちゃんの内容から始めて、テーマごとにお母さんたちと語り合うのよ。1歳位になると子ども自身が主体的に遊ぶという内容へとテーマが変わるのです。こうした段階的に学ぶ構成は大切でしょ。SPACEは、ピア・ヘルプ(親同士の協働)に役だっていくと信じています。子どもがすごく小さいうちは、たくさんの仲間と話したい時期だから。そして、赤ちゃんが大きくなると今度は、子どもと単純に遊びを楽しみたいと思うの。そのお母さんたちの気持ちにSPACEの内容は、応える形になっている。私もファシリテーターとして、親の話したいという思いを受け止めて、聴き手に徹している。もちろん必要な情報は教えてあげる。ただ聴いてあげることの方が多いかもしれない。ここは、赤ちゃんをという宝物を連れてくる特別な場所なの。私たちファシリテーターは、親子とともにその貴重な時間と活動を共有できている。この仕事ができ誇りに思うわ。

### (3) SPACEの課題

SPACEのよい面を語るDさんだが、課題については以下のように述べている。

私が感じているSPACEの課題は、参加しているお母さんのほとんどが仕事に戻らなければならぬというプレッシャーを抱えているということ。1学期が終わっては1組抜け、2学期が終わったらまた1組抜けと仕事に戻っていくので同じメンバーで1年間継続していくことが難しいことが本当に残念。やっぱり親たちが仕事に戻ってしまい、参加者が途中から減ってしまうのが一番の課題ですね。もうひとつの課題は、時間のこと。SPACEを午後に設定するしかないこと。午前は、プレイセンターをしているから。赤ちゃんの睡眠のリズムに合わせながらセッションを実施していくことが課題です。まあ、赤ちゃんの場合は、理想的な時間なんてないのだけれど。

### (4) ファシリテーターとしての課題

SPACEでは、仕事復帰する親が多く参加メンバーが減ってしまうことや時間設定がハードルとなっていた。そこで、ファシリテーターが抱えている課題についても聞いてみた。

ファシリテーターの資格を一旦取ってしまうと、研修がなく自分の技術をアップデートすることができないことです。私は、この地区で一番古いファシリテーターの一人なのですが、ファシリテーターとして必要な情報や技術の更新ができていないのが悩み。SPACEの資格取得の際は、全国組織のきちんとしたトレーニングが用意されているのですが、それ以降は何も研修していないの。新しい歌や親と話すべき話題、活動例などもっと学びたいと思っています。そうした学びは、日々のセッションにも活かされるので。研修制度を新たに作るには、お金もかかるし、私たちファシリテーターも時間を作らなければならないので難しいことなのかもしれないけれど、私の場合、ファシリテーターになってからずいぶんの年月が経過しているので年に1回でもトレーニングや研修があればと考えています。それが、ファシリテーターとしての課題と言えるでしょう。

## 6. 結論

本研究の目的は、プレイセンター改革の一環で2003年から試行的に取り組みされたSPACEプログラムについて、その活動実態を探り、SPACEを運営する支援者や参加する母親がどのようにSPACEを評価しているのかを分析することを通して、SPACEが日本でも応用できるかを検討することであった。主な結果は、以下のとおりである。

- ①SPACEプログラムは、初めて子育てをする親が同年齢の子どもを持つ他の親と知り合い、交流できる場となっていた。継続的に同じメンバーで参加することにより、本音の話ができるようになり、子育ての悩みを解消していた。また、ファシリテーターがいることにより、当事者同士のディスカッションが息詰まることなく、親子に安心感を与えていた。

- ②参加後の変化は、変わった親と変化を感じない親と両方いた。変わったと感じる者は、他の親の育児を参考にし、子育てに悩むことが少なくなったと述べている。ファシリテーターたちからの意見では、本音を語りたがらなかった親が本音を語るようになったこと、子育てに妥協点を見いだすことで柔軟さが出てきたことや子ども対応が上手になったことが指摘された。その結果、親としての自信獲得にもつながっていると明言されていた。
- ③仕事に復帰しなければと考えている親が多く、プログラム半ばでSPACEを抜ける親がいるという問題が明らかとなった。実際、SPACE参加後にプレイセンターのメンバーとして残る親子は全体の25%（16組中4組）程度となっている。
- ④SPACEを実施する時間帯は、両プレイセンターともに12:30～15:00となっていた。午前中の施設は、プレイセンターが使用しているため、SPACEが午後にしか実施できない状況となっていた。そのため、乳幼児の午睡の時間に当たってしまうことが懸念されていた。
- ⑤ファシリテーターの定期的な研修制度がないことが課題となっていた。SPACEの支援者として必要な知識や技能が学べる機会を増やしていくことが必要とされていた。

以上の結果から、結論を示すことにしよう。SPACEの支援者や参加者たちは、プログラムを通じて「初めての育児を地域で安心して行えている」「ファシリテーターがいることと固定メンバーであることの安心感」「本音で育児を語り合えること」「月齢が近い子どもの状況を知ること子ども理解が深まったこと」「居住地域に友達ができること」「子育てに自信が持てること」「子どもとの関わりが上手くなること」などがSPACEから得られた成果だと述べた。その一方で、「職場復帰や仕事へのプレッシャー」「時間設定が乳幼児に合っていない」「ファシリテーターの成り手不足」「ファシリテーターのブラッシュアップ研修がないこと」がSPACEを実施していく上での課題となっていることがわかった。

日本では、保育者不足が問題となっているが、SPACEでも同じ問題が生じていた。加えて、SPACEの場合はパート勤務となるため、支援者への手当が少ないことも成り手不足の要因となっていた。そのため、多くのファシリテーターが正規の仕事を求めて辞めてしまうという結果を招いていた。また参加する親たちも生後6カ月を境に職場復帰を決意したり、仕事を意識し始めたりする傾向にあることがわかった。それでもなおSPACEは、初めての子育てを支える活動として高く評価されていた。その結果、親たちの孤立化を防止し、育児の悩みや不安感、孤立感の軽減に寄与していた。現在の日本においては、フィンランドのネウボラ制度に見られるような妊娠期から就学前までの切れ目のない子ども家庭支援制度や母子保健施設の創設に注目が集まっている。しかし、これら事業だけではなく、乳幼児とその親が定期的に集まり、活動できるSPACEのような場所も必要となるであろう。

とりわけ日本で活動するプレイセンターの場合は、0歳児～3歳児の参加者が多いため、プレイセンターの活動に入るまでの接続期間として通常セッションとは別にSPACEと同様の乳幼児向けセッションを実施していくことも一案となる。具体的に日本のプレイセンターで

実施する際には、通常セッションの親たちが乳幼児セッションのファシリテーターとして遊びや活動を先導することから始めることができるだろう。また、母子を孤立化させない事業の一つとして地域子育て支援拠点事業や認定こども園における子育て支援の枠組みのなかで活用することも可能である。SPACEは、保育所にも幼稚園にも入園していない低年齢児とその親のための居場所ともなりうるため、全世帯対応型の事業を推進する子ども・子育て支援新制度の意図にも適った活動であるといえるであろう。

(附記)本研究は、平成27年度 淑徳大学短期大学部学術研究助成(研究助成費)の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 島津礼子「ニュージーランド プレイセンターの特筆と課題—Parental Involvementの視点から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』61号、2012、p207-213、佐藤純子「親が協働する幼児教育施設 プレイセンター」『まちと暮らし研究 子どもの権利と多様な学び』No.21、2015.6、p63-72.
- 2) Valerie N. Podmore and Sarah Te One. 2008, *Nurturing a culture of care for infants and first-time parents: The SPACE Programme at Te Murua/Mangaroa Playcentre Early Childhood Centre of Innovation (Round Two)*, Wellington.
- 3) Densem, A. Chapman B. 2000, *Learning together: the Playcentre way*, Auckland: Playcentre publications.
- 4) プレイセンターの学習コースは、参加する全ての親の受講が必修となっている。プレイセンターを知る入門コースから、プレイセンターの指導的な役割を担うために必要な内容を学ぶディプロマコースまで6段階のコースが提供されている。
- 5) SPACE NZ Trust 2012, *Annual Report 2011*, Wellington.
- 6) SPACE NZ Trust 2013, *Annual Report 2012*, p.140, Wellington.